はしがき

神田外語大学大学院言語科学研究センター（CLS）の2006年度における研究活動の成果の一端として紀要の第6号を刊行いたします。

CLS が支援している研究活動は、本学大学院博士後期課程における研究分野とも呼応しますが、大別すると、理論言語学に通じるものと言語教育学に関わるものです。前者は、井上和子 CLS 顧問を中心に、CLS 研究員、非常勤研究員、院生を含めた定期研究会において、様々な角度から理論研究、記述研究を追求し、言語学関連研究会も開催しました。後者についても、英語教育レクチャーや早期英語コロキアムを開催しましたが、それらは、継続中の以下の２つの公的補助金によるプロジェクトの遂行と関係しています。(2006年度の CLS 主催による研究会については、巻末のコロキアム報告参照)

一つは、日本学術振興会科学研究費の補助金（基盤研究(B)）による小林美代子教授を研究代表者とする３年間のプロジェクト『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』(研究分担者：長谷川信子、堀場裕紀江、他）で、今年度がその最終年度となり、集大成としての報告書が刊行されます。(巻末の研究成果報告を参照してください。）もう一つは、科学技術振興事業（JST)社会技術研究事業の公募型研究領域＜脳科学と教育 II＞に採択され、2004年12月に発足した他大学との５年間の協同研究プロジェクト『言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究』(研究リーダー：萩原裕子、首都大学東京）で、CLS（研究代表者：長谷川信子／研究分担者：井上和子、小林美代子、堀場裕紀江）では、そのサブ領域の「言語能力検査・評価」を担当し、応用言語学、理論言語学の知見に基づき、早期英語教育のための語彙リストを編纂し、それを基盤とした、独自の言語テストの開発、施行、および分析を行ってい

ます。その成果と中間報告は、今年度、国内外の学会で発表しましたが、残念ながら、本号には含むことができませんでした。

本号に収められた論文は、上記の活動を反映するもので、言語学関係では、藤巻、長谷川、井上、神谷、上原の論文が、言語教育関係では、小林・宮本の論文が収録されています。また、斎藤の論文は言語文化学に関するものです。

まず、言語学関連の論文ですが、いずれも、統語構造とそれと関わる語彙的意味、語用的意味など、いわゆる「統語論との境界現象」を扱い、理論構築と現象記述の両面に新たな観察や分析を提示しています。「統語と語彙的意味」との関わりで、藤巻が日本語の慣用句を、神谷が英語の-able 形容詞を扱っています。藤巻論文では、慣用句の一部を成す目的語の移動可能性の観点から、統語と慣用表現の解釈の関係を討議し、移動先となる統語的位置が文全体の意味とどのように関わるかを検討しています。神谷論文は、英語の-able 形容詞の派生に課せられる制限をケース・スタディとして、語彙概念構造と統語構造、さらには音韻構造との関係を探っており、視野の広い労作です。「統語構造における機能範疇の意味と機能」に関しては、長谷川と井上が扱い、長谷川論文では英語の-en や日本語の「られ」といった受動形態素を little-v の一種とみなし、その格と外項に関わる素性から異なるタイプの受動文が派生されるとの分析を提示しています。井上論文は、昨年度の紀要（第５号）の論文をさらに発展させ、主文のモーダルと条件節との関係を主文のモーダルと関わる CP システムの選択制限として捉える分析を提示しています。また、上原論文では、授受補助動詞の「ていただく」が持つ謙譲と尊敬という語用的機能に着目し「統語と語用の接点」の問題として興味深い観察を行っています。

英語教育関係では、上述のように、『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』の研究報告書が刊行されることもあり、本紀要には、小林・宮本による論文１編だけの掲載となっていますが、そこでは、早期英語教育に最も重要と思われる教師に求められ

る資質について、早期英語教育に携わる教員に対する意識調査の結果を踏まえて考察しています。

斎藤の論文は、英語文化圏における引用句辞典に収録された引用文から、その「誤った引用」も含め、そこから見えてくる言語表現と言語文化学・文献学との関わりを考察しています。

上述したものを含めCLSでの研究活動は、CLSが本学大学院言語科学研究科の付属施設であることから、大学院専任教員がその活動の中心となっていますが、実質的な多くの研究と作業は、CLSに籍を置く、研究員（専任）の神谷昇さん、非常勤研究員の藤巻一真さん、宮本弦さん、大倉直子さん、上田由紀子さん（2006年8月まで、現在は、秋田大学教育文化学部・助教授）、上原由美子さん、綿貫啓子さん、研究補佐員の森真理子さん、事務補佐員の椎名千香子さん、そして多くの大学院生、研究生、修了生によって遂行されています。心より感謝しています。

そして、本号の刊行は、神谷昇さんと椎名千香子さんの献身的な働きのお陰で可能となりました。本当にどうもありがとう。

２００７年３月

言語科学研究センター・センター長
長谷川　信子